

貨幣蓄蔵と支払手段の統一物としての 世界貨幣

板 木 雅 彦

はじめに

第1節 貨幣蓄蔵と支払手段

第2節 貨幣蓄蔵と支払手段の統一物としての世界貨幣

第3節 世界貨幣と世界市場恐慌

むすび

はじめに

本稿のテーマである「貨幣蓄蔵と支払手段の統一物としての世界貨幣」は、わたしの別の論稿「社会科学方法論としての弁証法の定式化」(板木(1997))の研究のなかから生まれた副産物である。弁証法の論理を『資本論』のなかの「価値論」で例証する作業の一環をふくらませて整理したものが、本稿の内容である。したがって、本稿が上記の論稿の成果を前提として書かれていることをあらかじめお断りしておきたい。

まず最初に、「世界貨幣」が『資本論』第1巻、第3章「貨幣または商品流通」のなかで、次のような位置を占めていることを確認しておこう。

第1節 価値の尺度

第2節 流通手段

第 3 節 貨幣

- a 貨幣蓄藏
- b 支払手段
- c 世界貨幣

第 1 章「商品」、第 2 章「交換過程」を受けて、第 3 章、第 3 節 c 「世界貨幣」は、『資本論』のなかで、最初に世界市場についてふれた箇所である。このことにまず、十分な注意を払っておこう。

よく知られているように、マルクスが『経済学批判要綱』で構想していた「経済学批判体系プラン」のなかのいわゆる「後半体系」の一つ、「生産の国際的關係」は、国際的分業の分析から開始されることになっていたり。このプランの中核を担う『資本論』の叙述は、「資本主義社会の富の基本形態である商品」（いわゆる端緒商品）の分析から開始された。では、「生産の国際的關係」は、何から分析を開始すべきなのだろうか。わたしは、その役割を担うものが世界貨幣ではないかと想像している。世界市場と世界経済へ連なる分析の端緒が、世界貨幣ではないか。もちろん、この主張の当否は、「生産の国際的關係」の体系的な叙述そのものによって論証されなければならない。ただ、少なくともここで確信をもって言うことは、この世界貨幣の分析が、国際貿易、国際投資、国際金融の基礎的な諸カテゴリーを獲得するために、まず最初にくぐり抜けなければならない難関であるということである。

本稿の課題は、世界貨幣そのもののなかに世界市場恐慌の抽象的可能性がすでに含まれていることを明らかにするという一点に絞られている。もともと、世界貨幣をめぐる三つの論理を示すことをもくろんで本稿の準備が開始されたが、残念ながらその一番目の課題だけですべてに紙幅が尽きてしまった。他日別稿を期したい。

1) 「生産の国際的關係。国際的分業。国際的交換。輸出入。為替相場。」(マルクス(1981) s.43, 62ページ)

第1節 貨幣蓄蔵と支払手段

『資本論』第3章「貨幣または商品流通」は、すでに述べたように、第1節「価値の尺度」、第2節「流通手段」、第3節「貨幣」からなっている。この三つの節の構成は、貨幣そのものとしての貨幣、あるいはまた現物の金としての貨幣が、価値尺度機能と流通手段機能の統一物であることを示している。そこでまず、これら二つの機能の統一物としての貨幣を振り返ったうえで、貨幣そのものとしての貨幣の機能、すなわち貨幣蓄蔵、支払手段、世界貨幣の3つの機能を関連づけながら、世界貨幣をとらえることにしよう。

貨幣そのものとしての貨幣の機能とは、価値という社会的な存在——したがって、触ることも臭うこともできない超自然的な存在——を、その現物形態を使って、まるでその自然的な属性であるかのように定在させることである。物質的な富ではなく、価値そのものの絶対的な社会的物質化として貨幣商品・金が生身で登場する。つまり、金はもはや、価値尺度機能の場合のように現物がたんに観念的に存在していればよいというものでもなく、また流通手段機能の場合のように価値の代理物（価値章標）でまにあわせ可能というものでもない。使用価値物としても、価値物としても、貨幣としての金そのものが現存していなければならない（マルクス（1966）160ページ）。そのもっとも典型的な姿は、貨幣蓄蔵の機能においてみられる¹⁾。

本来、貨幣は、一般商品とのあいだで相互転態する関係、すなわち商品流通過程のなかではじめて存在することが可能になる。貨幣のない商品流通が考えられないように、商品流通のない貨幣もまた考えることができない。つまり、商品の流通と貨幣の定在とは、相互に不可分の関係としてあ

1) 板木（1997中）第4節「例証：貨幣機能論」を参照。

るわけである。ところが、貨幣蓄蔵者は、この切っても切れない二つの関係を切り離し、まるで貨幣だけがこの世界に存在するかのように蓄蔵を行なおうとする。こうした貨幣の蓄蔵は、購買（貨幣の商品への転化）なき一方的な販売（商品の貨幣への転化）を繰り返すことで、生身の金を手元に蓄えていくことによって果たされる。つまり、商品流通を否定することで、価値物としての貨幣が自立して現れ、貨幣は、非流通手段として、流通過程の外に滞留するわけである。

しかし、このような商品流通の否定を、流通部面全体にわたって展開することは、はたして可能だろうか。どれだけ頑張ってみたところで、それは、無理な相談というものである。個々の貨幣蓄蔵者が、個々の商品流通を寸断して、貨幣・金を蓄蔵することは確かに可能である。しかし、もし彼らがこれを商品生産社会全体で全面的に展開したら、商品生産と流通そのものが否定されてしまう。したがって、個々の商品流通は否定しながらも、総体としての商品流通には全面的に依拠しつつ、ただ個別的に貨幣を定在させる機能——これが貨幣蓄蔵機能であるといえるだろう。顕在的には個別的な商品流通の否定を媒介として、そして潜在的には総体としての商品流通の肯定を媒介として、貨幣そのものを個別的に定在させるわけである。このような貨幣と商品流通の関係を、次のように定式化しておこう。なお、板木 (1997) にしたがって、定式の左側、太い矢印の発している側が、主要なモメントを表わしている。

貨幣蓄蔵機能 = [貨幣そのものを個別的に定在させる機能

←⇒潜在的な商品流通（顕在的な商品流通の否定）を
媒介として]

これに対して、同じ貨幣としての貨幣と言っても、支払手段としての機能は、貨幣蓄蔵とちょうど対立的な関係にある。貨幣が商品所有者の手に保持されている点では変わらないが、その目的は、あくまで商業手形の利用によっても相殺できなかった債務を支払うための準備金としてである。顕在的に商品流通に全面的に依拠し、さらにこれをいっそう促進すること

がこの機能の第一の目的であり、価値の蓄蔵は、目的ではなく手段にすぎない。貨幣は、確かに非流通手段ではあるが、非流通手段として流通に入り込む。しかも、貨幣蓄蔵機能のように、貨幣が限定的、個別的に定在しているのではない。むしろ、貨幣は、商品流通のありとあらゆる部面で全面的に蓄蔵されることをもって、商品流通の飛躍的な発展を達成する。すなわち、

支払手段機能 = [顕在的に商品流通を促進する機能

←→全面的に展開された貨幣そのものの定在を媒介として]

このように、貨幣蓄蔵と支払手段とは、それぞれを構成する二つのモメントの関係がちょうど逆になるという意味で、対立的に区別された二つの機能である。

ここで、両者の関係についてさらに考察を深めよう。そもそも、蓄蔵貨幣が商品生産社会のなかで偶然的、例外的ではなく、一定の広がりをもって現実に形成されるためには、商品流通が広範に発達していなければならない。一方で商品流通を否定してどんどん金を溜め込んでいく貨幣蓄蔵があればこそ、他方でそれに負けないくらいの勢いで商品流通を活発化させると同時に、その流通に必要な貨幣量を大幅に節約していかななければならない。もし、この条件が満たされないならば、貨幣蓄蔵がそもそも不成功に終わってしまうからである。そして、これを可能にするものこそ、支払手段としての貨幣の機能にほかならない。信用貨幣の成立とこれを利用した債権・債務の相殺によって、大口取引は一気にこの支払手段機能によって片付けられていく。商品流通の発達につれて、独立の致富手段のための貨幣蓄蔵に比べて、ますます支払手段の準備金のための貨幣蓄蔵が増大していく。以上から明らかなように、貨幣蓄蔵機能は、支払手段機能の存在を予想し、それを潜在的に含蓄していると考えることができる。

[貨幣蓄蔵⇒支払手段]

そして言うまでもなく、支払手段機能は貨幣蓄蔵機能を現実に含んでい

る。集中的な債権・債務の相殺は、支払手段として登場しなければならない貨幣の量を大幅に減少させるが、それでも生産期間の違い、販売量の違い、時期の違い等々、商品生産と流通につきものの種々雑多な条件が、けっしてその完全な相殺を許さない。むしろ、その不完全な相殺と残額の支払手段による決済を必然にする。ここに支払手段準備金のための貨幣蓄蔵が前提されることになる。こうして、貨幣蓄蔵と支払手段とは、前者が後者を潜在的に含み、後者が前者を現実的に含む関係にあると考えることができる。

貨幣と一般商品という二つの切り離しえない、そして、二つしか存在することのない、完全に対立するモメントから構成された貨幣蓄蔵と支払手段。一方は、貨幣を個別的に定在させるという機能が、個々の商品流通の否定を媒介として導きだされる。他方は逆に、この貨幣蓄蔵機能をいわば量的に全面展開したその極み、商品流通の促進へと機能が質転換したものである。両者は論理的な発展関係にある¹⁾。貨幣蓄蔵があればかならず支払手段がなければならず、支払手段があればかならず貨幣蓄蔵もなければならぬというように、互いに可能性と現実性を与えあい、必要かつ十分な条件を生み出し合う関係——両者は、このような必然的な関係にあるということができる。

[貨幣蓄蔵 \leftrightarrow 支払手段]

しかし、貨幣としての貨幣の機能が貨幣蓄蔵と支払手段の二つで尽くされるわけではない。貨幣蓄蔵に対して、そのまったくの対立物たる支払手段——ちょうどプラスとマイナスのようなこの二つで、貨幣としての貨幣のあらゆる機能が尽くされるように、いっけん思われるのだが、じつはそうではない。たんなる貨幣蓄蔵でも、支払手段でもなく、しかも貨幣蓄蔵であり支払手段でもある貨幣——そのような両機能の統一物が、世界貨幣なのである。

1) 板木 (1997中) 第 4 節参照。

第2節 貨幣蓄蔵と支払手段の統一物としての世界貨幣

まず、世界貨幣の純化された表象を提示することにしよう。世界貨幣の活動の場である世界市場では、価格の度量標準、鑄貨、補助貨幣、価値章標に関する「国家の保証と強制通用力」(マルクス(1966)183ページ, s.117.)が及ばないため、国民貨幣がそのままの姿で登場することができず、いったん生身の金銀の姿をとった世界貨幣に転換されなければならない¹⁾。そして、世界市場における物質代謝、すなわち国際的な商品流通は、輸入と輸出とで相互に分離して現れる。つまり、国内市場のように連続的な商品流通 $W-G-W$ が形成されることなく、輸入 $G-W$ と輸出 $W-G$ が分離されて、貨幣は、輸入国にとって一方的な購買手段として登場する。しかし、貿易がそのつど購買手段としての世界貨幣で決済されるのでは、金銀の国際的輸送のための費用や、国民貨幣と世界貨幣との交換にかかわる費用など、いわゆる流通空費が膨大なものになってしまう。そこで、いったん分離された輸入 $G-W$ と輸出 $W-G$ が、それぞれ国内市場ごとに一括集約された上で、外国為替手形を利用して一括相殺される。そして、輸出入にかかわる債権・債務の残額のみが、世界貨幣によって最終的に決済されるわけである。これが、国際的な支払手段としての世界貨幣の機能である。さらに、国際的な購買手段でも、支払手段でもなく、富の絶対的・社会的に物質化されたものとして、一国から他国へ一方的に富を移転する機能をはたすこともある。戦争賠償金の支払や援助、資本輸出がこの典型的な例と

1) 世界貨幣は、「価格の度量標準や鑄貨や補助貨や価値章標という国内流通部門でできあがる局地的な形態を再び脱ぎ捨てて、貴金属の元来の地金形態に逆戻りする」(マルクス(1968)185-186ページ, s.156.)。そして、このように本来の地金形態に逆戻りするという意味でも、また、かつて原生的な共同体と共同体との接触点で貨幣が商品流通を媒介したように、今度は国内流通と国内流通の接触点で商品流通を促すという意味でも、「貨幣はその原生的な最初の形態を取りもどすのである」(マルクス(1966)196ページ, s.125.)。

してあげることができるだろう。具体的にこのような三つの機能をはたすものが世界貨幣・金である（マルクス（1968）187ページ，s.157—158.）。以上が、わたしたちの分析対象たる世界貨幣の純化された表象である。

ここからまず明らかになることは、世界貨幣が、たんなる貨幣蓄蔵機能をはたすものでもないし、たんなる支払手段機能をはたすものでもないという事実である。確かに、国際的な購買手段や価値移転の際には、貨幣蓄蔵が前提されている。購買手段としての世界貨幣は、過去に国際商品の一方的な販売を行なった結果、蓄えられた蓄蔵貨幣が、一回きりの商品交換のために世界市場に登場してきたものである。また、価値移転の場合には、これは蓄蔵された富の一方的な移転であって、商品流通と直接何のかかわりもない。つまり、商品流通を否定して生み出された蓄蔵貨幣が、——貨幣蓄蔵機能とは異なって——一回きりの商品交換に支出されるか、あるいはそのまま移転されるかするところに、世界貨幣独自の特徴がある。他方、世界貨幣は、国際的な支払手段としても機能している。世界市場の特殊な条件のもとで、購買手段機能だけではとうてい実現することのできない大規模な国際商品流通を可能にするものが、この国際的な支払手段としての世界貨幣の機能である。分離された輸出と輸入とを外国為替で結び付け、相殺し、それでもなお残された国際的な債権・債務関係が、世界貨幣によって最終的に一括して決済される。このように、貨幣蓄蔵機能と支払手段機能を対立する二つのモメントとする統一物が、世界貨幣なのである²⁾。この関係において、主要なモメントは、貨幣蓄蔵でなければならない。なぜなら、国際的購買手段としての機能を前提としてはじめて、国際的支払手段としての機能の成立をいうことができるからである。

世界貨幣 = [貨幣蓄蔵 ↔ 支払手段]

この定式を展開すると、次の式が得られる。

2) 「蓄蔵貨幣および一般的支払手段として、貨幣は世界市場の一般的交換手段となり、概念からだけでなく、存在様式からみても、一般的商品となる。」(マルクス(1965) V.995ページ)

世界貨幣 = [{貨幣そのものを個別的に定在させる機能

←⇒潜在的な商品流通（顕在的な商品流通の否定）を
媒介として}

←⇒ {顕在的に商品流通を促進する機能

←⇒全面的に展開された貨幣そのものの定在を媒介と
して}

第3節 世界貨幣と世界市場恐慌

では、世界貨幣としての機能が貨幣蓄蔵機能と支払手段機能との統一物であるとは、いったい何を意味しているのだろうか。両者の統一物であるためには、世界貨幣は、たんに貨幣蓄蔵機能をはたすのでもなければ、たんに支払手段機能をはたすのでもない。しかも、貨幣蓄蔵機能をはたすと同時に、支払手段機能をはたすものでもなければならぬ。貨幣蓄蔵機能の主要なモメントは「貨幣そのものを個別的に定在させる機能」であり、支払手段機能の主要なモメントは「顕在的に商品流通を促進する機能」であるから、両機能の統一物は、まず何よりもこの両主要モメントの統一物でなければならない。つまり、世界的な商品流通を促進しつつ、あるいはそれを媒介としつつ、価値の絶対的な定在として貨幣が蓄蔵されるのである。

しかし、はたしてこのような両主要モメントの統一は可能なのだろうか。「貨幣そのものの定在」が主たる目的である場合には、それは「潜在的な商品流通（顕在的な商品流通の否定）」を媒介として達成されなければならなかった。また、「商品流通の促進」のためには、「全面的に展開された貨幣そのものの定在」がその媒介物でなければならなかった。つまり、「貨幣そのものの定在」と「商品流通の促進」は、本来、対立する二つのサブ・モメントとして並び立つことのできないものなのである。しかし、それでも両者は、統一されなければならない。

{貨幣そのものを個別的に定在させる機能 \leftrightarrow 顕在的に商品流通を促進する機能}

そうであればこそ、本来、並び立つことのできないものの統一の必然性は、結局、次のような両機能の「危険な衝突の可能性」として現象することになる。

世界貨幣は、普遍的価値の体現物として自己目的的に、流通過程の外部で蓄蔵されていく。しかし他方で、商品流通の促進のためには、非流通手段として流通過程に投じられなければならない。世界貨幣が両機能の統一物であることからくるこの相反する二つの運動は、いずれ、この内部ではけって媒介されることのない矛盾に転化する。貨幣蓄蔵機能にもとづいて貨幣を次々と定在させつつ、同時に商品流通を促進しようとするれば、それが小規模にとどまっているかぎり、さしたる問題もなく進行させていくことができるだろう。しかし、この両機能の同時進行がある一定の量的規模を突破したとき、両機能のたんなる対立は矛盾に転化する。それまで個別的でしかなかった貨幣の定在が流通のありとあらゆる部面での貨幣の運動の全面的ストップとなり、商品流通の体系が完全に寸断されてしまう。すなわち、商品流通の促進からその否定への質的転換である。

{顕在的な商品流通の否定 (潜在的な商品流通)}

\leftrightarrow 全面的に展開された貨幣そのものの定在}

これが世界市場恐慌の抽象的な可能性を定式化したものである。

以上の関係を総括すれば、両機能の統一物である世界貨幣は、次のように定式化できることになるだろう。

世界貨幣 = [{貨幣そのものを個別的に定在させる機能

\leftrightarrow 顕在的に商品流通を促進する機能}

\leftrightarrow {顕在的な商品流通の否定 (潜在的な商品流通)}

\leftrightarrow 全面的に展開された貨幣そのものの定在}]

この定式をもとに、再度、検討してみよう。貨幣蓄蔵機能と支払手段機能との統一物として世界貨幣は現れるから、上の定式の左辺のように、両

機能それぞれの主要な機能「貨幣そのものを個別的に定在させる機能」と「顕在的に商品流通を促進する機能」が統一されて二つのサブ・モメントとなり、世界貨幣の主要なモメントを構成しなければならないはずである。ところが、この二つのサブ・モメントは、本来、そのままでは統一できない矛盾を形成しているから、右辺の次要のモメントによって媒介されなければならない。つまり、「全面的に展開された貨幣そのものの定在」による「顕在的な商品流通の否定（潜在的な商品流通）」である。すなわち、左辺ならば右辺（[⇒]）。逆にみよう。右辺に表わされた全面的な貨幣の定在による商品流通の否定とは、世界市場恐慌にほかならないが、この世界市場恐慌は、それ自身、自立して存在することのできないものである。世界市場恐慌は、かならず、活発な世界的商品流通をその不可欠の対立物として前提しなければならない。もしそうでなければ、商品や貨幣という存在そのものが世界市場で意味をなさなくなってしまう。つまり、それ自身では媒介することのできない矛盾である右辺は、左辺をとともなうことではじめて、運動を可能とする形態を獲得する。すなわち、右辺ならば左辺（[←]）。以上より、世界貨幣の概念を構成する二つのモメントは、互いに必要かつ十分な条件として、必然性の関係にあることがわかる。すなわち、[←⇒]。

世界貨幣の具体的な機能にそくして、さらに説明を試みよう。よく知られているように、兌換通貨制度のもとでは、紙幣に対する国内的な兌換準備金としての世界貨幣・金の機能と、国際収支の逆調に備えた対外的な支払準備金としての世界貨幣・金の機能が、中央銀行に保有されている一定量の金準備に二重の負担をかけ、危険な衝突を引き起こす可能性が生まれる。紙幣の金兌換とは、国家権力を背景として発行された紙幣に対するブルジョア社会の不信の表明であり、富の普遍的な定在としての金を死守しようとする行動にほかならない。商品生産社会全体を覆う金兌換の大きなうねりが、いったいどのようにして必然的、周期的に発生するかという問題は、商品の生産と流通だけが論じられているこの次元では明らかにすることができない。しかし、この金兌換運動がいったん暴走をはじめると、

中央銀行に保有されている金は、対外的な支払準備金としての機能を停止せざるをえない。ここに貨幣蓄蔵機能と支払手段機能との「危険な衝突の可能性」は現実のものとなる。世界的な諸支払の決済の連鎖が突如中断され、いっさいの国際商品の使用価値が顧みられなくなって、唯一の富としての金が求められる。世界市場に、「貨幣飢饉」(マルクス(1968) s.152, 180ページ)が発生する。

「たったいままで、ブルジョアは、繁栄に酔い開化を自負して、貨幣などは空虚な妄想だと断言していた。商品こそは貨幣だ、と。いまや世界市場には、ただ貨幣だけが商品だ!と言う声が響き渡る。鹿が清水を求めて鳴くように、彼の魂は貨幣を、この唯一の富を求めて叫ぶ。恐慌のときには、商品とその価値姿態すなわち貨幣との対立は、絶対的な矛盾にまで高められる。」(マルクス(1968) s.152, 180ページ)

世界貨幣それ自体が世界貨幣恐慌の必然性を宿しているわけではない。しかし、その抽象的可能性は、すでに世界貨幣の存在そのものによって与えられているのである。

最後に、世界貨幣の概念を導出する上の最後の過程を、弁証法の論理にそくして検討してみよう。わたしたちは、世界市場の豊かな表象を分析することで、世界貨幣が貨幣蓄蔵機能と支払手段機能を同時にはたすものであることを知っている。ただし、世界貨幣があるときは蓄蔵貨幣として現われ、また別の機会には支払手段として現われるといった折衷的な存在ではなく、一つの自立した統一物であることも知っている。では、世界貨幣が両者のたんなる並列や並存ではなく、真に二つの融合した存在であるためには、どのような条件が満たされていなければならないのだろうか。

世界貨幣が両機能の統一物であることは、2節の最後で、ひとまず次のように定式化することができた。

世界貨幣 = [{貨幣そのものを個別的に定在させる機能

←⇒潜在的な商品流通 (顕在的な商品流通の否定) を
媒介として }

←⇒ {顕在的に商品流通を促進する機能

←⇒全面的に展開された貨幣そのものの定在を媒介として}}

しかし、このままでは、両機能のたんなる並列でしかない。真に二つが融合した存在であるためには、それぞれのモメントを構成する二つのサブ・モメントが組み替えられなければならない。では、どのように組み替えられるか。

世界貨幣の主要なモメントが貨幣蓄蔵であるのだから、そのサブ・モメント「貨幣そのものを個別的に定在させる機能」を主要なサブ・モメントの位置から外すわけにはいかない。つまり、主要なモメントの主要なサブ・モメントは、「貨幣そのものを個別的に定在させる機能」である。これを大前提にして、二つのモメントがそれぞれ対立するサブ・モメントの統一でなければならないという原則を貫きながら、両機能のサブ・モメントを組み替える方法は、ただ一つしかない。すなわち、貨幣蓄蔵機能と支払手段機能それぞれの主要なサブ・モメント同士を組み合わせる新たな主要なモメントとし、次要なサブ・モメント同士を組み合わせる新たな次要なモメントとする方法である。つまり、結果的には、「潜在的な商品流通(顕在的な商品流通の否定)」と「顕在的に商品流通を促進する機能」の位置が逆転することになる。

世界貨幣 = [{貨幣そのものを個別的に定在させる機能

←⇒顕在的に商品流通を促進する機能}

←⇒ {顕在的な商品流通の否定 (潜在的な商品流通)

←⇒全面的に展開された貨幣そのものの定在}}

弁証法の見地からすれば、あらゆる事物の存在形態は、二つの対立物とその両者の統一物の三つしかありえないということも、ここから納得されよう。これが、いままで検討を重ねてきた世界貨幣機能を導出するプロセスの弁証法的な根拠である。

む す び

以上で、貨幣の世界貨幣としての機能が貨幣蓄蔵機能と支払手段機能の統一物であることが論証できたと考える。また、そこから必然的に、世界貨幣の概念そのもののなかに世界市場恐慌の抽象的可能性が含蓄されていることも、あわせて論証できたと考える。

しかし、まだ多くの手付かずの課題が残されている。たとえば、世界貨幣が、国際的購買手段、国際的支払手段、国際的価値移転手段という三つの具体的な機能をはたすことは、本文でも述べたとおりだが、この三機能はどのような関係にあるのだろうか。わたしは、国際的購買手段と国際的支払手段の両機能の統一物として国際的価値移転機能を理解したいと考えるが、このことは、今日的な援助や資本輸出の問題の理論的な意義をつかむという課題に直結している。

また、『資本論』ならびに『経済学批判』の「世界貨幣」の項は、理論研究のための刺激に満ちた数々の論及を含んでいるが、その中でもとりわけわたしの興味をそそるものは、産金国で生み出された新産金の世界市場にはじめて登場する際、どのように価値尺度されるかに関するマルクスの言及である。この論点の追求は、いままでの国際価値論の研究に根底的な修正を迫るものになるかもしれない。

そして言うまでもなく、もっとも今日的な理論課題として、いわゆる「国際通貨」の概念規定の問題があげられる。この解決のためにも、上で述べた世界貨幣の具体的な三つの機能に関する詳細な検討が是非とも必要である。

このように、『資本論』を含めたマルクスの経済学批判体系の中で最初に世界市場について触れた「世界貨幣」の項は、国際貿易、国際投資、国際金融のすべての分野にわたって、基本的なカテゴリーを確定しようとする際の最初の難関として、わたしたちに挑みかかっているのである。

＜参 考 文 献＞

- 深町郁彌 (1991) 「第 1 章 マルクスの貨幣論」西村閑也, 深町郁彌, 小林襄治, 坂本正著『現代貨幣信用論』名古屋大学出版会
- 板木雅彦 (1997) 「社会科学方法論としての弁証法の定式化(上)(中)(下)」『立命館国際研究』第10巻第1, 2, 3号, 1997年6月, 9月, 12月刊行予定
- 木下悦二 (1979) 「第 2 章 『資本論』における世界貨幣と為替相場」『国際経済の理論——その発展と体系化のために——』有斐閣
- マルクス, K. (1965) 『経済学批判要綱(草案) 1857—1858年 第 5 分冊』(高木幸二郎監訳) 大月書店
- マルクス, K. (1966) 『経済学批判』(杉本俊朗訳) 大月国民文庫
- マルクス, K. (1968) 『資本論』(マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳) 大月書店
- マルクス, K. (1981) 『マルクス資本論草稿集① 1857—58年の経済学草稿 第 1 分冊』(資本論草稿翻訳委員会訳) 大月書店 (Karl Marx, Friedrich Engels : Gesamtausgabe (MEGA) , 2. Abteilung : "Das Kapital" und Vorarbeiten, Band 1, Karl Marx, Ökonomische Manuskripte 1857/58, Teil 1, Dietz Verlag Berlin, 1976.)
- 西村閑也 (1989) 「金本位制」小野朝男, 西村閑也編『国際金融入門』第 3 版, 有斐閣, 第 6 章
- 徳永正二郎 (1985) 「為替相場——世界貨幣・国際信用決済システム・資本輸出」木下悦二, 村岡俊三編『資本論体系 8 国家・国際商業・世界市場』有斐閣
- 山田喜志夫 (1989) 「金」小野朝男, 西村閑也編『国際金融入門』第 3 版, 有斐閣, 第 13 章